７月学習会のご案内

平成２５年７月３日

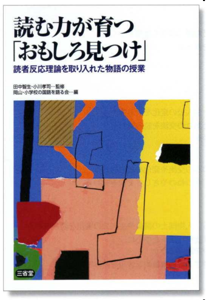
２００回記念講座へ向けて（７月の陣）

夏休みまで残り２週間程になりました。先生方におかれましては，学期末のお忙しい時期をお迎えのことと思います。

今月の語る会は，２００回記念講座へ向けての提案検討パート３を行います。本番の８月１６日に向けて，おそらく最後の会になるのではないかと思います。成績処理等でお忙しい時期ですが，ぜひお集まり頂き，みなさんで検討をおこなった上で本番を迎えることができればと考えています。よろしくお願いします。

なお，当日の案内状も同封します。会への参加を多くの先生方へ呼びかけて頂きますようお願いいたします。（案内状は各学校へもお送りしています。）

日　時　　平成２５年７月１３日（土）９：３０～１２：００
場　所　　岡山大学教育学部附属小学校　２階　会議室
　　　　　TEL(086)272-0511　　FAX(086)271-3455
連絡先　　小出　真規（こいで　まさき）TEL　090-5704-7339
　　　　　m-koide@okayama-u.ac.jp（学校パソコン）
内　容　　国語を語る会　２００回記念国語講座（仮称）へ向けての
　　　　　提案検討（予定）
　　　　　「生き物は円柱形」他（５年光村図書）
　　　　　　近藤　昌子　先生（岡山市立横井小学校）
　　　　　「たんぽぽのちえ」（２年光村図書）
　　　　　　嶋村　尚美（和気町立和気小学校）



＜お知らせ＞

※「おもしろ見つけ」の本を，附属小でお取り扱いしております！来られ前に冊数をご連絡ください。代金引換となります。（特価！）多くの方に手にとっていただけるように，みなさん！宣伝活動をがんばりましょう！

※　今年度の**年会費2，000円**を集めます。まだ納めて頂いていない方はよろしくお願いします。（やめられたり休会される場合も一声かけてくださるとありがたいです。）

※　駐車場は北門（幼稚園）からの入場になります。

※　校舎扉前には案内の黒板が出ています。ご確認の上，中にお入りください。（扉が閉まっていましたら，上記の小出の携帯電話に連絡をください！）

6月の学習会の報告

（文責　近藤昌子）

６月の語る会は，田岡先生による２００回記念講座レポート案「ウナギのなぞを追って」（光村図書４年下）について話し合いました。

小川先生より

〇一人読みの活動
- 文学→書き込みが主。
- 説明文→ハートマークなど書き込んでいく取り組み

図を提示して書き込んでいく取り組み

どんな一人読みの活動がよいかの選択が必要

〇反応

・情意反応

調査した人のすばらしいところなどに反応

レベルが低いと見られがちだが，塚本さんへのすごいという思いが自分も塚本さんのように成長していきたいという人間性を培う意味がある。

一次の導入でどう反応を引き出したか。

・書き手反応

文学の場合は作者が紙芝居のような場面を作っていく。作品世界をどう感じるかは読み手に任されている。書き手には反応しにくい。

説明文の場合は，書き手がある目的をもって読み手に提示している。書き手が大きな存在意味をもつ。

→書き手はこういうストーリーの中でこういう問いを作った，というのも書き手反応。「のです」（自信をもっている）「かもしれない」（ちょっと不安）といった書き手の反応が読み手に伝わってくる。説明的文章の中では大きな存在。

・批評反応

この授業では「納得できますか」という具体的な発問。内容面，書きぶりに納得かどうかという反応。今日の検討課題の一つ。

〇一次の直観

・題名と第１段落と１番最後の段落を提示して「何を伝えようとしていますか」より，４年生という段階を考えて「このお話はみんなに何を伝えようとしていますか」と言う発問から入って，子どもが理由付けで題名，第１段落を選んでくるようにできないか話し合った。直観をどう単元のめあてにつなげていくか。

〇本日の課題

大切な反応とは？子どもの読みの実際から紡ぎ出すには。直観をどうもたせるか？

〇８月１６日　２００回記念の予定について

田岡先生の発表

実際の授業の様子を交えながら，すばらしい実践の報告をしていただきました。

１　単元名　予想と発見の関係や筆者に反応しながら，調査のすばらしさや筆者の思いを読もう

２　学習材　「ウナギのなぞを追って」（光村図書４年下）

３　単元目標

・マリアナの海とウナギの調査の関係や，レセプトファルスの生態の特徴から産卵場所を調査する手がかりを得て推理していく過程，調査の中でさらに次々と生まれてくるウナギのなぞを追う楽しさなどについて読むことを通して，情熱をもってなぞを追究し続ける塚本さんの研究に対する姿勢のすばらしさや，身の回りでもった疑問を追求することの面白さを感じ取ることができる。

・「レセプトファルスの体の特徴から，どれだけ見つかりにくかったかわかる」といった気付き反応，「体の大きさや輪の数などを結びつけて，たまごを産む場所を予想している」といったつなぎ反応，「『ついに』『のです』から，塚本さんのうれしさが伝わる」といった書き手反応，「何年もとれなくても，あきらめず調査を続けるところがすばらしい」といった情意反応，「レセプトファルスの体の輪と海流をつないで考えると，二十日分のきょりを計算して海流をさかのぼれば産卵場所にたどり着けるという塚本さんの予想は納得できる」といった批評反応などを使いながら，事実と推論，仮説と検証結果を関係づけたり，図表の必要性を確かめたりして，塚本さんの調査のすばらしさを読むことができる。

４　単元構想（全７時間）

第１次　単元を貫く大きなめあてをもつ。

第１時　題名，第①②③段落を読んで全体的論理的直観をもつ。

第２時　直観をもとに全文を読み，単元を貫く大きなめあてをもつ。

第２次　おもしろ見つけにより、調査と塚本さんのすばらしさを読む。

第１時　情意反応，気付き反応，書き手反応を使って④⑤段落を読む。

第２時　情意反応，気付き反応，つなぎ反応，書き手反応，批評反応を使って⑥段落を読む。

第３時　情意反応，気付き反応，つなぎ反応，書き手反応，批評反応を使って⑦⑧段落と２つの図表を読む。

第４時　情意反応，気付き反応，つなぎ反応，書き手反応，批評反応を使って⑨⑩⑪段落を読む。

第３次　図表についての効果や、図表に表れている塚本さんの意図・工夫を読む。

第１時　図表を選び，効果や工夫を一人読みした後，同じ図を選んだ友達と読んだことについて話し合う。

５　学習展開　　省略

話し合いの柱　　直観をもたせるところ，批評反応と書き手反応の有効性
一次と二次の３，４時を中心に

Ｑ＆Ａ

小野先生

つながっているところ，すばらしいところ，思いが伝わるところというふうに子どもは反応を意識しているが，批評反応は子どもが意識はしていない。別の質と考えてよいか。

田岡先生

一度反応を経験したら，納得できるかどうかもめあてに入れられるのではないかと考えたがやめた。見つける反応が多くて混乱しないように，取り上げていない。最後に促すようにした。

三宅先生

大きなめあて「事実と予想，予想と発見がつながっているところ，塚本さんの思いが伝わるところなどを見つけながら，調査や塚本さんのすばらしさをたしかめよう」と各時間のめあて「調査のすばらしいところ，塚本さんの思いが伝わるところなどを見つけよう」への流れは？

田岡先生

１次ですばらしさはつながるところと思いと分類していたが，２次になったとき子どもは調査がすばらしいことを見つけようとした。大きなめあての「～を見つけながら」の中にはないが，大きな枠でめあてを考えた。

小川先生

情意反応の中に気付き反応があり，すべての反応がフラットではない。うまいこと整理ができればよい糸口となる。

三宅先生

塚本さんのすばらしさが大きくあり，調査的なすばらしさ，思いのすばらしさの大きく二つがある。調査のすばらしさは大きいのだが，事実と予想のつながりはより分析的だと思う。順序が今はスッキリした。

田岡先生

最初に必ずつなぎ反応は出てくるが，後からその反応を入れだんだん詳しくしていくべきか迷った。

小野先生

「動いて考える」の初めての説明文と子どもの反応はどうか？何かつながるものはあるか？

田岡先生

つなぎ反応の経験が生きたのは，「一つの花」のとき。「動いて考える」は図とつなぐことが多く，言葉をつないでいくのは「一つの花」。場面をつないでみる子どもは，前の段落を追ってみることが

できた。

磯野先生

学習させるためのめあてという掲げるイメージがある。田岡先生のこの授業のめあては，全体から何となくとらえた大きなものを置き，だんだんと読むごとに積み重なって，めあてが鮮明になっている。２次の最初からつながりぎが出なかったのは，必要性がなかったからで，その後つながりが大事と考えたからめあてになってきた。

つながりという言葉は，研究自体，筆者の考え自体がつながっている。それを追ってつながりがはっきりしてきている。前の説明文は形が違う。つながりを見つけさせるには意図的にしなければならないが，この文章だから自然に見つけられたのでは。

小川先生

・文学では言葉の響き合い。「キャラメルも」「かぼちゃも」「毎日爆弾が」「覚えた言葉は一つだけ」４つをつなぐと「ゆみ子ってとってもかわいそう」が読める力をつける。４年生は一つ一つの言葉を分析する力がついてくる。もう一つは響き合い。そういう意味でのつなぎ反応がある。場面が変わると行動が変わる。行動を追いかけると変化が読める。その意味のつなぎ反応がある。

・説明文では，何かの事実を提案して考えを述べる。考えと考えと考えを述べてまとめる，というつながりがある。段落相互の関係。つなぎ反応を駆使できる子どもは段落相互を読んでいるとも言える。事実の所と考えの所をつないで読むのはきわめて重要。つなぎ反応へ目を向けるのは説明的文章の特徴の一つ。

・今回は事実から推論のつなぎ反応，海流と体の形，年輪と着眼する視点が変わっていっている。つなぐことで思考の流れが分かる。「ありの行列」の砂糖，大きな石，体の仕組みをつなぐとウィルソンさんすごいと言える子は段落相互の関係が読める，ウィルソンさんの思考の流れが読めるということ。つなぎ反応は何を指導するかの具体バージョン。経験させることで説明文を読む力がつく。

話し合いの結果

小川先生

①提案のおかげて一歩前に進むことができる。

②Ｐ１３図と文章をつなぐところ

ＰＩＳＡ型学力観　文章だけの情報だけでなく図との情報ともつなげて読む試みが存在している。図の中に書き込む，上の本文とつなぐなどの頭の使い方がこれからは重要。

②二つの文は必要か？（最後の段落）

はじめはウナギのなぞを追いかけているという直観が働くが，最後の２行があることで，身の回りにある疑問をもちそれを解決することの楽しさを伝える人間の営みが読める。はじめの直観は仮説。ずっと読んでいくことで言葉や表現から自分の直観を修正していく。ウナギを題材としながら人間の営みを伝えようとしていることを読んでいくことで，豊かな読みの経験をすることができる。それが最後の段落の扱いの意味。

グループ１

○大きなめあてについて

様々な感想がどう集約されていくか。第１時の「説明文が伝えようとしていること」を直観させることで，感想の方向性を意図している。全文を読まないことで直観が絞れている。

○批評反応について

発問の仕方が「納得できますか」といつも同じ発問でどの学年でも同じになればあきないか？また，文章構成をつかませることや理解できているかを確かめるための発問となっていないか。

○反応のネーミング

「つながっているところ」「すばらしいところ」「筆者の思いが伝わるところ」と子どもが見つけやすくカテゴライズされていてすばらしい。

グループ２

○直観

どんなことを伝えたいんだろう，と問われためあてで段落を読むことは，読みの構えをもつという

意味で有効。

４年生で直観をもたせるのに情報を絞るのは妥当。高学年なら全文でもいけるのかとも思う。

〇問いが隠れている文章

１～３段落までは興味を掘り起こすため筆者の工夫が盛り込まれている。筆者の着目するいい手立てが打たれている。問いと答えの関係に着目させてはいないが，筆者に着目させることで目標が十分に達成されている。

〇大きなめあてについて

感想がまとめられたものととらえられる。後で修正が図られるまとめで後に整理されていけば十分効力がある。めあてよりまとめとしての機能。

〇おもしろ見つけ

新たな語彙を見つけて増やし充実していくおもしろ見つけのよさが表れている。書き手反応では筆者にはじめから着目していたので反応を高められていた。分析していくことが深められる中で出てきた批評反応は使っていける反応なのかについては，難しいと言われたが異質な反応。学習活動ではないか。批評している中身はつなぎ反応や書き手反応がより深くなっている。批評という活動で反応を高めていくのがねらいでは。

グループ３

〇直観とは

一回読んだら大体分かる子ども

根拠をもとに自分たちが仮説できる。その仮説があっていたかどうかを確かめていく勉強をしている。検証する中で直観を育てていく。

〇丸ごと読みの入り方

１～３場面から入る方法，全文からとらえさせる方法がある。丁寧にすることも大事だが，どこに心が動いたかと大きく聞いても，終末や題名から感想が出て同じような感想が生まれてくる。丁寧に２段階かけて入っていった実践。

〇大きなめあてとめあて

逆転は改善できる。

グループ４

〇一次の直観

全文提示のめあての場合「調査すること明らかになったことを読もう」となり情意反応書き手反応を授業のどこでもたせるかの工夫が必要。題名と部分を読んでめあてをもつと書いてあることを予想して読むことができること，書き手反応や気付き反応が３段落でできる。

〇批評反応

納得できるかどうかの取り上げ方→筆者の取り組み方に目を向けることで感動を伴って分かることができた。

書き手反応がよく出ていたのは筆者と研究者が同じで反応しやすかった。

田岡先生

〇批評する学習活動について

それまでも文意に沿って調査や塚本さんについての反応を深めていたが，批評することで文意と対峙して反応を深めていたと思う。どうその反応を落ち着けていくかはこれからの課題。

磯野先生

〇「〇〇反応」のよさ

筆者を読むとか，段落相互の関係は今まで読んできたのに〇〇反応として読ませるのはなぜか？

つながりを読んでも，心の中に落ちないと読んだことにはならない。みんなに説得して書いていると読んでもそれに対して自分がどう受けとめ感じているかがないと読んだことにならない。そこで自分は筆者にこう反応した。それはここにこう書いてあるからだ。そう解釈を深めることで自分の思いは深まるという，らせんのような読み方をしていっている。 味わって読むことが反応して読むということへの話題提起がある。